

奥の細道

松尾芭蕉

古典の日

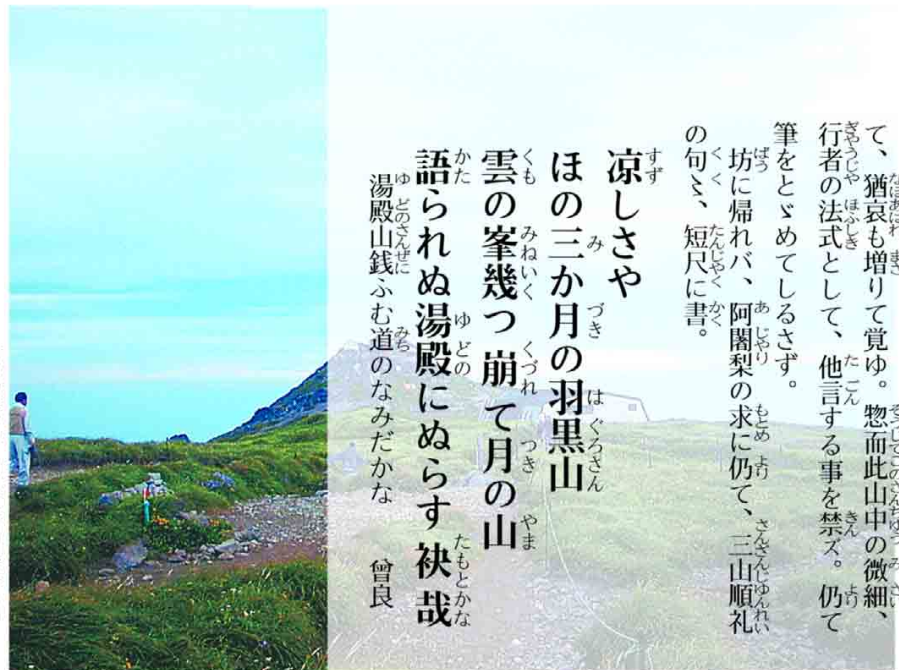
十六 月山



八日、月山に登る。木綿しめ身に引かけ、宝冠に頭を包、強力と云ものに道びかれて、雲霧山気の中に氷雪を踏でるぼる夏八里、更に日月行道の雲関に入かとあやしまれ、息絶へ身こへて頂上に至れば、日没月あらはる。笹を鋪、篠を枕として、臥て明るを待。日出て雲消れば、湯殿に下る。

谷の傍に鍛冶小屋と云有。此国の鍛冶天水を撰て、爰に潔斎して鍛を打、終「月山」と銘を切て世に賞せらる。彼龍泉に鍛を淬とかや干将・莫耶の昔をしたふ、道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばしやすらふ程、三尺計なる桜の下に埋て、はるをわすれぬ遅桜の、花の心わりなし。炎天の梅花爰にかほるがごとし。行尊僧正の哥爰に思出て、猶哀も増りて覚ゆ。惣而此山中の微細、行者の法式として、他言する事を禁ズ。仍て筆をとめてしるさす。

坊に帰れば、阿闍梨の求に仍て、三山順礼の句々、短尺に書。



新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

涼しさや

ほの三か月の羽黒山

雲の峯幾つ崩て月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂哉

湯殿山銭ふむ道のなみだかな 曾良

芭蕉も登った月山の今の山頂付近(山形県鶴岡市や西川町にまたがる) 芭蕉庵ドットコム提供

夏から秋へ、昼から夜へ

芳賀徹さん とたずねる おくのほそ道

六月三日午後遅く、芭蕉と曾良は羽黒山麓に着くと、さそく門前町で染屋を営む岡司左吉を訪ねた。この人も露丸と号する俳人で、このあたりの宗匠格だったという。太石田の俳人高野一榮が書いてくれた羽黒山別当代会覚あての紹介状を左吉に託すと、彼はすくなくそれを本坊にとどけてくれ、会覚の厚意で二人は羽黒中腹南谷の別院に泊まることとなった。こども俳諧のネットワークが芭蕉の旅を支えてくれたのである。南谷を足場として二人が月山に登頂したのは、六月八日と芭蕉は書くが、実際には六月六日(陽暦七月十二日)、好天の真夏の一日だった。前日から精進し、羽黒権現に詣でた上で、頭は白木綿の山伏頭巾で包み首に注連の輪をかけ、修験者姿での登山である。南谷から二十五余りの長い険しい山道だった。日と月の通い路に立つ雲の関所かとも思われるなかに踏み入り、「息絶へ身こへて」山頂に達したとは、芭蕉四十六歳の実感であつたらう。海拔一九八四メートル、詩人の生涯最高の登頂である。

やがて「日没して月あらはる」。天地運行のこの大景観を眼の前にして、この日一日の経験を思い返すと、芭蕉の胸裡におのずから成つたのが次の一句であつたらう。

雲の峯幾つ崩て月の山
これもまた雄大な時空の変転を極小詩型のうちに呑みこんで、なんと強いものか。朝出立したときから山路の前後に仰ぎつづけたのは、真青な夏空に輝く白銀の色の入道雲だった。それが一日中幾つも幾つも湧いてはうつろっていったが、やがて気がつく。薄闇のなかに立ちあらわられていたのは夕月に照らされた蓋山、月山のすがたであった。「雲の峯は夏で昼で、陽で動で生で、男性のように屹立するもの。月の山は秋で夜で、陰で静で死で、女性のように丸く伏するもの。前者から後者へのうつろい、前者が後者のうちに折れ伏し鎮められてゆく経緯を、芭蕉はまたも「幾つ崩れて」との単純にして強力な動詞一つで言い尽くしたのである。



今も欧米に根付く「聖書学」

世界で最も多くの人に親しまれてきた古典といえは多分「聖書」が一番でしょう。私が初めて聖書を手にしたのは大学一年の頃と記憶しています。「天地創造」で始まる旧約聖書は、遠隔の地のお伽噺のようでした。



天江喜七郎さん 立京都都立国際会館館長

それから38年後、私は世界最古の都市といわれるシリアの首都ダマスカスに滞在しました。市街を一望のもとに見下ろすカシオン山に登ると、そこにはアダムとイブから生まれたカインが、弟のアベルを殺したとされる場所があります。昼寝をしていたアベルの頭をカインはラクビーボールほどの石で打ち砕いた。と地元ガイドはまるで目撃したかのように説明するのです。

また、その山の反対側にはアベルのお墓まであって、シリア派イスラム教徒の巡礼の地となつているため、話は一層現実味を帯びてきます。

旧市街にあるウマヤド・モスクの中に入ると、その一角にはイエスキリストに洗礼を施したバプテスマのヨハネの首塚があります。イスラエルのヘロデ王がサロメの要求に屈して、衛兵に命じて持ってこさせたと言われるあのヨハネの首が葬られているのです。

こうして見ると、歴史としての聖書学が今なお欧米の大学で盛んな理由もつなげます。



伏見稲荷大社の石段と鳥居(京都市伏見区)

は、疲れと苦しさからダウンし、山中で休息をとっています。10時頃のことでした。40歳余りの婦人が「私は今日七度詣でをするつもり。もう3回巡りましたが、あと4回くらい何ともありません」と、目の前を元気に通り過ぎるのを見聞きし、「うらやましげなるもの」と言っています。今も、石段の途中で立ち止まると、清少納言のため息が聞こえてくるかのようです。

2011年、伏見稲荷大社は、稲荷大神がご鎮座されてから、ちょうど1300年を迎えます。(NPO法人・都草 安田 富枝)

清少納言もため息 稲荷詣の坂道

文学ウォーク

東山三十六峰の最南端、稲荷山の麓に位置している伏見稲荷大社は、古くから多くの人々の信仰を集めてきました。清少納言もそんな中の一人でした。『枕草子』の158段に稲荷詣の様子を書いています。

本殿に参拝し、稲荷信仰の霊地、稲荷山を巡拝するのが稲荷詣の普通の形です。本殿から千本鳥居をくぐり、奥社でお山めぐりの安全を祈願して、熊鷹社、三ツ辻へと進みます。三ツ辻から四ツ辻までは約400段の石段を登ります。清少納言が登った頃は、今日のような整備はされてなく、坂道をよじ登るような状態だったのでしよう。

2月初午の朝早く都をたった清少納言

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

親しむ



電気のつくり手として、できることがあります。

毎日の暮らしを支えながら、これからの環境をやさしく守っていくために。関西電力は、低炭素社会の実現をめざして、発電時のCO₂を抑えるさまざまな取り組みをすすめています。

電気はやさしい未来へ